2024-3-2

日本の貧困

3年3組10番　川端寿菜
3年4組 7 番　太田優菜
3年5組22番　辰巳和也

Keyword: 「貧困」「貧困の連鎖」「子ども食堂」「ボランティア」「コミュニケーションの貧困」

多くの人は金銭的な問題が日本では貧困と深く関わりがあると考えるだろう。実際に今の日本では餓死するなどの極限状態に至る問題は少ない。しかし私たちは、金銭的な問題から何か貧困問題が起きているのではないかと考えた。そこで金銭的な貧困が私たち人間にもたらす問題点を挙げてみた。例えば、お金に余裕がなく周りの人や物に危害を加える・心身共に状態が悪くなり精神的にもダメージを受ける等々の問題だ。これらは解決すべき問題であると感じ、私たち高校生にできることを考えた。そこで実際に子ども食堂へと足を運んだ。なぜなら、自分たちなりに考えた結果、金銭的な貧困問題と子ども食堂は何か関わりがあるのではないかと予想したからだ。私たちの中で子ども食堂はどちらかと言うと十分な食事が得られないマイナスイメージだった。だが、本当はプラスイメージを抱くことのできる素晴らしい場所であるのではないかと考えるようになった。当時私たちは子ども食堂に対する知識が全くなかったのでまずは知識をつけ現状を知ることが必要であると考えた。知識を少しでも得ることで見方を変えることができ、目的の解決に繋がり役立つと思った。

「子ども期に不利を背負ったまま成人になった人が子どもを生みますと，次の世代に不利が受け継がれる，いわゆる貧困の連鎖が起こります-注①」という先行研究のもとで、子ども食堂にメールでの質問・訪問から得た情報を分析して、子ども食堂は貧困対策のために行われているのかということを明らかにした。まず子ども食堂にメールで、どんな子供が来ているのか・子ども食堂の仕組み・子ども食堂を開設してよかったことについて質問した。次に実際に「たわわ食堂」と言う生駒駅近くの子ども食堂へ行き、そこでたわわ食堂のボランティアの方々に質問やお手伝いを行った。また、『子ども食堂は本当に貧困対策のための場所であるのか』という仮説を立てた。

本論1

たわわ食堂を訪問する前に、「みんなはアイスをなめている-注③」と言うSDGsに関する本を読んだ。この本はSDGsのGOAL1.貧困をなくそうということに関連する内容だ。そこから貧しさは連鎖するということを学んだ。そして、得た情報をもとに次のことを考えた。

①親が金銭的に余裕がない（子ども期に不利を背負っていた）
②勉強しようにも文房具を買ったり、塾に行ったりするお金がない
③自分が望んでも高校や大学に進学できず就職するのも難しくなる
④思うような仕事に就けず暮らして行くのに十分なお金が手に入らない
⑤自分の子どもにも貧しい暮らしをさせてしまうことになる

①～⑤の内容を踏まえて、貧困の連鎖が起こる原因は何であるのだろうかと言うことを考えた。また、この問題を今後どのように対処していくことが必要であるのかということを考える必要があることにも気がついた。少しでも改善へと一歩近づくことで私たちの生活は良くなるだろう。

この事を加味して、金銭面的なことが原因である貧困は日本では私たちの身の回りにある子ども食堂と関わりがあるのではないかと考えた。なぜなら、私たちの子ども食堂に対するイメージはどちらかと言うと良くなかったからである。特に、食事が十分できていない子どもたちがご飯を食べに来ている場所であるという印象があったからだ。そこで「子ども食堂が何なのか」、貧困と関わりがあるのではないか（貧困対策）と仮説を立てた。実際に子ども食堂では、どのような取り組みをされているのかを知るため生駒市の一般社団法人和草「たわわ食堂」を訪問しお手伝いをさ

せてもらった。訪問してみると子ども食堂のイメージが大きく変わった。今までは、食に困った子どもがご飯を提供してもらっている場所であるというマイナスイメージだったがそんなことはなく、コミュニケーションをとることができる素敵な場所であるというプラスイメージになった。訪問した先の子ども食堂の印象は明るく、大人から子どもまでのみんなが笑顔で楽しそうだったことがきっかけである。空き時間にボランティアの方に質問をした。内容は、ボランティアをすることになったきっかけ。この質問に対し、「自分の子どもたちは新しくそれぞれ家族を持ち、今は旦那さんと2人で過ごしている。そのため会話の数が一気に減ってしまったので、地域の子どもたちと関わることでコミュニケーションをとりたかったからである」とおっしゃっていた。この話を聞き私たちは今の日本では「コミュニケーションの貧困」が起きていて問題となっているのではないかと考えた。

最近日本では、核家族化や共働きの家庭が多くなってきている。すると子どもたちの家庭内での会話数が減ってしまったり、地域との関わりが減ってしまい人と関わることに苦手意識を感じてしまう恐れがある。そこでこのような問題を改善しコミュニケーションの場を自然と繰り広げてくれるのが子ども食堂であるのではないだろうかと考えた。だが子ども食堂は全ての市町村にあるわけではない。そこで貧困の連鎖と同様に多くの人に子ども食堂の良さや今後子ども食堂の数を増やしていくべきであることを知ってもらうことが必要であると考えた。それに加え、屋内だけでなく屋外でオープンスペースの子ども食堂を作ることで、子ども食堂を利用したいけど足を運びにくい子どもが利用できるようになると考えた。また、遠くまで足を運ばずに子ども食堂へ行くことができるよう市区町村それぞれに1ヶ所子ども食堂を開設することで今後の私たちの生活に笑顔が増えると考えた。

考察1

子ども食堂での活動を踏まえると、精神的な問題に関わっているコミュニケーション不足の問題の緩和につながるのではないか。また、新しいコミュニティが誕生するのではないかと考えた。そして私たち高校生にできることは、身近で起きている問題に気づき、解決に向けての一歩を踏み出すことが重要であることも分かった。これらのことを加味して、子ども食堂と企業を結びつけることができたらいいと思った。さらに、子ども食堂同士のネットワークを作れたら今よりも快適な環境を作り出せると思った。なぜなら、これらを実現すると、持続可能なコミュニティ作りに必要な、企業の宣伝や子ども食堂の活性化に繋がると思ったからだ。今後は、これらの試案を円滑に行える組織を作ることができるよう努力したいと考えている。

本論2

では一体なぜ、「子ども食堂が貧困対策の子供を集めるところ」という誤解が広まったのか。「子ども食堂がマスメディアに頻繁に登場するのは2015年頃からだった。2013年に『子どもの貧困対策の推進に関する法律』が制定されて、翌14年に政府の大綱が策定され、全国各地で子どもの貧困対策が実施段階に入った時期に当たる。マスメディアが『ではどんな対策が？』と探したときに見つかったのが学習支援とこども食堂だった。必然的に、こども食堂の説明書きに『子どもの貧困対策として行われている』という形容句がついた。-注②」という文章より、マスメディアの影響を受けて子ども食堂は貧困で困っている子どもたちがご飯を食べるための場所だという認識が世間に広く、広まってしまったのだろう。マスメディアがもたらす情報は私たちの生活に大きく関わっている。だが、すべての情報が私たちにとって有益なものとは限らない。そのため、きちんと情報を吟味して理解することが必要だろう。

考察2

子ども食堂が食べ物を十分に食べることのできない子供達のために行われているという考えは、どのようにすれば見直すことができるだろうか。私たちも「たわわ食堂」を訪問する前には同じように考えていた。しかし、このことは多くの人にいち早く知ってもらう必要があるだろう。また、子ども食堂に対する価値観を変えていかなければならないとこの活動を通して感じた。そして、

子ども食堂のような場所が、現代社会における問題を解決することができる大切な場所だということを多くの人に知ってもらうことも必要である。

結論

私たちの仮説の結果は『子ども食堂は本当に貧困対策のための場所』だった。しかし、私たちが想像していた「貧困対策のための場所」とは大きく異なっていた。子ども食堂は子供たち同士がご飯やお菓子を食べたり、おしゃべりをしたり、ゲームをしたりして笑顔の絶えない豊かな場所だった。ボランティアの方も「大人と同じように責任感を感じながら生きている子どもたちにとって、少しでも気の休まる場所になれば良い」と話しておられた。コミュニケーションの希薄化が顕著に現れている現代社会にとって、たくさんの子どもたちが集まって、交流することのできる子ども食堂のような場所は、今日の社会問題を解消するためにはとても貴重な場所であると感じることができた。

おわりに

私たちは2年間の探究活動を通して、主なテーマとして「日本の貧困」をベースとした取り組みを行った。その中で「課題発見力」「創造力」「探究力」「協働力」を主に成長させることができた。そして今後はこれらの力を活用し、子ども食堂と私たち学生、そして企業が関わりを持つことが必要なのではないかと考えた。そのため私たちは、ボランティア活動に積極的に参加し、たくさんの人の笑顔が絶えず続いていくようなコミュニティを作れるようサポートしたいと考えている。また、正確な情報を収集し、円滑に物事を進めていけるよう努力していくことで問題解決に向けて新たな一歩を踏み出せるのではないかと思っている。実際に、子ども食堂・学生・企業が関わりを持つことで、学生が子ども食堂のお手伝いや宣伝をする、企業から子ども食堂への食料提供を行うことで、子ども食堂も食材を得られることに加え、企業のPRも同時に行うことが可能である。これらを達成すると、持続可能な社会実現に近づけるだろう。

参考文献・出典

①https://www.eco.nihon-u.ac.jp/center/economic/publication/report/pdf/36/36abe.pdf
日本大学経済学部経済学科研究所研究会 「子どもの貧困」阿部 彩 2010年12月2日
②https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2019/08/湯浅誠-論文「こども食堂の過去・現在・未来」.pdf 「子ども食堂の過去・現在・未来」 湯浅誠 (書誌「地域福祉研究」No.47、2019年3月)
③本→「みんなはアイスをなめている」 安田夏菜 2022.12.17 講談社1